

## 「ウチカヘス」考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 近藤, 明 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/430">http://hdl.handle.net/2297/430</a>

# 「ウチカヘス」考

—「ウチ」が接辞化しているものの場合—

近藤 明

On the Meanings of the Verb "Uchikahesu"

AKIRA KONDO

## 一 はじめに

先に拙稿「中古におけるウチ十他動詞の意味——源氏物語の場合——」(加藤正信編『日本語の歴史地理構造』明治書院 一九九七以下「前稿」)において、「ウチカ(掛)ク」「ウチス(捨)ツ」等の「接頭辞ウチ十他動詞」について、「ウチ」のつかない場合に比べて

○主体の意志性・意図性の弱さ

○対象への働きかけの弱さ

○対象の受ける影響・変化の弱さ

といった意味上の特色が認められることを述べた。

本稿で取り上げる「ウチカヘス」は、ある程度の用例数もあり、前稿の「ウチ十他動詞」に含めて扱われてよいものであった。しかし「ウチカヘス」は多義的であり、その点の整理が十分できていないと「ウチ」のつかない「カヘス」との意味・用法の比較が行いにくいという事情があり、また紙幅の関係もあって、前稿では取り上げることができなかった。本稿では、まず「ウチカヘス」の多義性の整理を行った上で、「カヘス」の意味と比較し、他

の「接頭辞ウチ十他動詞」と同様のことが「ウチカヘス」についても言えるかを考えてみたい。なお「ウチカヘス」についてこのような事を考えるには、前稿のように源氏物語の内部のみで論じるよりは、ある程度多数の資料に当って多くの用例を得た方がよいと思われる。しかし、中古と中世のある時期以後とで接頭辞「ウチ」の意味が変化している可能性があるとの見通しからすると、あまり広い時代にわたる資料を対象とするのも危険な面があり得るので、資料の時代を院政期を含めた中古に限ることとする。ただし勅撰歌集については鎌倉時代初期の新古今集までを含めることにする。

## 二 「ウチカヘス」の多義性

「ウチカヘス」という形を持つ動詞には、「ウチ」が動詞「打つ」としての意味を保っている場合と、接辞化している場合とがある。本稿は後者を考察の対象とするものであるが、前者と後者の区別が問題になるものや、歌で前者と後者が掛詞になっているものもあるもので、前者の動詞「打つ」の意味が保たれているものについ

ても一瞥しておこう。前者の「ウチカヘス」について、『角川古語大辞典』は

- ① 打たれた返報に相手を打つ
  - ② 田畑を鋤で打つて返す。耕す。田畑をすき返す。
  - ③ 討つて退却させる。撃退する。
  - ④ ばくちで先に負けて取られた分を取り返す。
  - ⑤ 波が岸に打ち寄せては沖へ返す。
- の五つの意味に分けている。

これ以外にも

壹岐・対馬の国の人をいとおほく刀夷国にとりていきたりければ、新羅のみかどいくさをおこし給て、みなうちかへしたまてけり。(大鏡 第四卷 道隆 一九四五③)

のように「戦つてとり返す」意味に解されるものや

馬ニ乗テ二百人許、来会り。(中略)此軍共、敏行ヲ見テ、打返テ前立テ行ク。(今昔 卷十四第二九 ③三一五⑤)

のように「馬を打つて逆方向に進ませる」という意味に解されるものがあり、これをつけ加える必要がありそうである。

後者の、「ウチ」が接辞化しているものについて、同じく『角川古語大辞典』は

- ① 前と逆になる。一転して反対の状態になる。
- ② 繰り返す。同じ行為を何度も元へもどって行う。
- ③ 裏返す。
- ④ 元と同じ状態にもどる。
- ⑤ ⑥ ひるがえす。
- ⑦ ひっくり返す。転覆させる。
- ⑧ いったん定めたことを変更する。
- ⑨ 場所を移す。変更する。
- ⑩ 「うちかへし」の仕掛けを用いて、舞台の背景を別の風景に

する。

の九つの意味に分けている。ただし⑦の意味は抄物の頃から、①の意味は近世からで、本稿で考察の対象とする時代には現われなもののようである。『日本国語大辞典』ではこの他に「返す。つき戻す」の意味を挙げているが用例は示されていない。出現の新しい⑦⑩をひとまず除くとしても、なお七種類(返す。つき戻す)を加えれば八種類)の意味があることになり、またこの意味の配列からそれぞれの意味の関連を読み取ることも容易ではない。更に同じく『角川古語大辞典』では、副詞「うちかへし」が別に立項されており、

① 何度も繰り返してするさま。

② しきりにつものるさま。

③ 相反する気持を持つたり、逆の行動に出たりするさま。

このように「ウチカヘス」は多義にわたるが、次節では現代語の「かえす」の意味分析を参考にして、このような多義性に関する程度の整理を行うことを試みたい。

### 三 「ウチカヘス」の多義性の整理

現代語の「カエス」の意味を、森田良行氏・大能清子氏・斎藤倫明氏らは

○ 反転

○ 逆方向への移動(下位分類として、物対象・事柄対象・人対象)

○ 元の状態への変化

の三つ(斎藤氏は更に「逆方向への移動」の自動詞的用法を加えた四つ)に大別して論じている。この分類は「ウチカヘス」の意

味を整理するにあたっても有効なものと思われる。本節では、この三分類に更に

○逆転・一転

○反復

の二つを加えた五分類によって、「ウチカヘス」の多義性の整理を試みたい。

【「反転」の意のもの】

「反転」の意については、「物の表裏の向きを逆にする事。」(森田氏)、「対象が『掌』(中略)等偏平なものは、対象を回転させて逆の面を出すことを表わす。(中略)セーターなど袋状のものも平面として捉え、内側になっている面を外側に出すことに着目している。」(大能氏)といった説明がされている。次の例などは典型的な「反転」の意味と考えてよいであろう。

- ①あさましやのどかにたのむ床のうらをうちかへしける波の心よ (蜻蛉 中 天禄二年六月 歌 一三二⑪)
- ②火桶の火、炭櫃などに、手のひらうち返しうち返しおしのおべなどしてあぶりをる者。

(枕草子 「にくきもの」段 二七④)

③黄なるからかみの、下絵ほのかにおかしきほどなるに、おもてのかたには楽府をうるはしく真にかき、うらには御筆とどめて草にめでたくかきて、たてまつり給へりければ、うちかへしうちかへし御覧じて

(大鏡 第三卷 伊尹 一四四⑭)

用例①は歌で、床の筵を裏返すことと、波の「打ち返す」とが掛詞になっている。用例③は手紙を繰り返し見るといふ「反復」の意とも解することができそうであるが、「おもて」「うら」といふことに特に言及しているので、「反転」の意味の可能性の方が高

いであろう。なお

④墨のいと黒う、くだりせばに、うらうへかきみだりたるを、うち返しひさしう見るこそ、なにごとならんと、よそにて見やりたるもをかしけれ。

(枕草子 「けさはさしも見えざりつる空の」段 二六七④)

という例も、「うらうへ」とあるところから、やはり表と裏を反転させつつ見るという意味であろうと考える。枕草子解環・新潮日本古典集成では「うらうへ」を行頭から行末の意とみて、「うち返し」を「くりかえし」の意としているが、「うらうへ」は「裏表」あるいは「左右」「前後」といった二つの対になるものをさすという性質が濃厚な語のようであり、「行頭から行末」というのではそのような対としての性格がやや弱い。また③のような用例もあることから推して、この例も「反転」の意味の例と見なしておく。この「反転」の意味に対応する辞書の説明は、『角川古語辞典』

表一 「ウチカヘス」の意味別の用例数

	総数	反転	逆転	逆方向(物・事柄・人)	元の状態	反復
後撰	3	0	0	0	3	0
拾遺	3	0	0	0	3	0
新古今	3	0	1	1	0	0
蜻蛉	1	1	0	0	0	0
落窪	1	1	0	0	0	0
源氏	17	1	1	0	2	0
枕	2	0	0	0	0	2
栄花	1	0	0	0	0	1
寝覚	2	0	0	0	0	2
狭衣	7	0	0	0	0	7
大鏡	1	1	0	0	0	0
今昔	1	1	0	0	0	0

○逆用形重複「ウチカヘシウチカヘシ」は一例として数える。  
○掛詞の場合、それぞれの意味ごとに数える。従って資料によっては意味ことと用例数の合計の方が用例の総数より多くなることもある。

ではまず④の「裏返す」であるが、

⑤「ソコノ銭ヲ以テ亀ヲ買ツル人ハ、不意ニ水ノ中ニシテ舟打返シテ死ヌ」  
(今昔 卷九第一三 ④二〇三⑤)

のような④の「ひっくり返す。転覆させる」の意味の「ウチカヘス」も、「物の表裏の向きを逆にする」「回転させて逆の面を出す」ことに違いはないのだから、「反転」の意味の一種としてここに含まれ得る。

また

⑥求子舞ひてかよる袖どものうちかへす羽風(源氏 匂宮 一四四一③)

のように⑥の「ひるがえす」に当たるものがあるが、「ひるがえす」は単に袖や旗などを風でゆれさせるだけでなく、逆の面・裏の面が現われるようにする意味があると思われる、ここでもそのように理解されるから、これも「反転」の一種、少なくとも「反転」からの派生的意味と考えることができるものと考える。

更に、時代はかなり後になるが、⑦の意味の源となっている歌舞伎の仕掛けの「うちかへし」も、背景の裏面を外に出して瞬時に情景を変えるようなものであり、「反転」の意味との関係で理解できそうである。

### 【「逆転・一転」の意のもの】

これは、それまでの事態とは正反対に、もしくは正反対とまではいかなくともそれまでの事態とは大きく一転して、という意味に解されるものである。

⑦「今、うちかへしつかうまつらんに、御心はゆきなん」  
(落窪 卷之二 一四七②)

⑧「あまり心ゆるびせんもまたいかにぞや。疑はしき下の心にぞあるや」とうちかへしのためへば

(源氏 早蕨 一六九四③)

⑨なれ見てし花のたもとをうちかへし法の衣をたちぞかへつる  
(新古今 一七一①)

用例⑦は、中将の発言で、今は北の方らに痛烈な復讐をしているが、いずれこれと正反対にねんごろに仕えれば、大納言も満足されるだろう、という趣旨の発言である。⑧は、匂宮が中の君に對して、薫にもっと親しく應對するようにと言った後で、あまりうちとけてもいいけないと、反対の事を述べている場面である。

用例⑨は、尼になったという人に「装束つかはすとて」詠んだ歌で、今までの「花のたもと」を一転して「法の衣」にしたて直す、ということである。「花のたもと」から「法の衣」というのは、「逆転」ではないにしても「一転」とは言えるような大きな変化である。なお久保田淳『新古今和歌集全評釈』で、この「うちかへし」を「うって変つてそれを裏返しして」と訳しているように、「反転」の意との掛詞になっていると見ることができよう。

この「逆転・一転」の意味は、「反転」の意味との関連が深いものと考えられる。裏表のある具体物が対象の場合「反転」の意味であり、それが事態・行為などが対象の場合に転用されると「逆転・一転」の意味になるものと解することもできよう。現代語の「手のひらを返すように」が、手のひらを反転させることから、態度を逆転かそれに近いほど大きく変えることの比喩表現になっていることも、思い合わされる。なおこの意味の場合、用例によっては他動詞性がはっきりしないものもあるようである。

『角川古語大辞典』では、動詞の「④前と逆になる。一転して反対の状態になる」と、副詞として立項されているものの「③相反する気持を持ったり、逆の行動に出たりするさま」が、この「逆転」に相当する。この意味の「ウチカヘス」は中古では確認できる限りすべて連用形「ウチカヘシ」の形で、その点副詞として別

語として扱うこともうなずけはするが、動詞の「反転」の意味から大きく隔たつてはおらず、これと意味的に連続性を持つものとしても理解できる。

なお、時代は新しくなるが④の意味は、この「一転」の意味か逆方向への変化の意味からの派生であろうか。

### 【「逆方向への移動」の意のもの】

対象の逆方向への移動を表すもので、『日本国語大辞典』でいう「返す。つき戻す」に相当するものであるが、この意味で用いられていると見られる例は、調査範囲では次の一例のみであった。

⑩ そのかみの玉のかざしをうちかへし今は衣のうらをたのまん

(新古今 一七一一)

この例は、東三条院が立后の時に姉の冷泉院后宮にもらった玉の髪飾りを返す時の歌だから、「逆方向への移動」(下位区分としては「物対象」に当たると言える。なお「衣の裏」というのは衣の裏の宝珠であり、玉の髪飾りから衣の宝珠へと「一転」させるという「逆転・一転」の意味も掛けられているものと見る。また「衣」との縁語として「ウチカヘス」が用いられている面もある。なお『新古今和歌集全評釈』では「玉のかんざしをお返しして、それにひきかえて」としているが、「ウチカヘス」に「ひきかえる(交換する)」の意を認める積極的な根拠はとくにないように思われる。

更に調査の範囲を広げて、『新編国歌大観 CD-ROM版』によつて、私家集・私撰集の類も含めた鎌倉時代までの歌を検索したところでも、縁語・掛詞との関連で使われている「逆方向への移動」の意の「ウチカヘス」の例は若干追加できるものの、縁語・掛詞との関連ではない純粹の「逆方向への移動」の例は、見出せないようである。

### 【「元の状態への変化」の意のもの】

この例は比較的少なく、他の意味との区別が難しいものもあるが、一応次に挙げるものはこの意味の例として扱っておく。

⑪ 今はとてひきいづる琴の音をきけばうちかへしてもなほぞ恋しき  
(蜻蛉 上 康保二年秋 歌 五三⑬)

⑫ 忘れにける女を思出でてつかはしける  
打返し見まくぞほしき故郷の大和なでしこ色や変れる  
(後撰 七九六)

用例⑪は母の一周期に叔母から送られた歌で、忌明となって琴を弾きはじめてのだが、その音を聞くときまた以前に立ち戻つて悲しみが新たになる、という意味と解される。用例⑫は新日本古典文学大系の注では「繰り返し」と訳すが通説だが(中略)一度忘れた女を改めて思い出す場合に用いられているので、『今一度。あらためて』の意に近い」としており、それに従いたい。後撰五二・五四四、拾遺集八一二(これは後撰五四四の歌の異伝かとされている)の例もこれと同様のものと見られる。

「逆転・一転」の意との区別が微妙な例もある。

⑬ 思しなびくばかりなれど又うちかへし定めかね給べき事ならねばいとかなひなし。  
(源氏 賢木 三三八⑥)

⑭ なをしのびてや迎へましと思す。又うちかへし「なぞや、かくうき世に罪をだに失はむ」と思せば  
(源氏 須磨 四一七⑭)

用例⑬は、六条御息所が伊勢下向の決意をしたのが、源氏の場合こまやかな手紙を見て、また決意のつかない状態に戻つてしまふそうだが、そうなるのはならないということ、用例⑭は、源氏が須磨に迎えようとするが、須磨下向前にそうはするまいと決意した心境に立ち戻るといふことと見られる。

これらの例は「逆転・一転」の意との区別に微妙なところがあ

るが、一応、⑬は伊勢下向の決意がつかない「元の状態」が、⑭は須磨下向前に紫上を須磨に伴ってはいくまいと決意した「もと

の状態」が、それぞれ想定できることから、「もと」の状態への変

化」の意味の例として扱った。

#### 【「反復」の意のもの】

既に述べたように、手紙などを見る場合は、用例③④のように「反転」の意との区別が微妙なことがある。一応、積極的に「反転」の意とする根拠のないものは「反復」の意の例として扱っておくが、これらの例の扱いによっては、「反復」の意の用例数にある程度の変動が起こり得る。しかし、次のような例はほぼ確実に「反復」の例と見なしてよいであろう。

⑬よそのものに思ひやらむほどの心の闇、おしはかり給ふにいと心苦しければ、うちかへしの給あかす。

(源氏 薄雲 六〇七⑨)

この意味の「ウチカヘス」の用例が見られるのは、散文では源氏物語からで、和歌では表に掲げたところでは新古今集からであるが、私家集・私撰集なども含めて『新編国歌大観 CD-RO M版』によって検索したところでは

⑯あしのねの生ふるあら田を打返し下にぞ思ふ心あるらし

(信明集 三七)

のように後撰・拾遺時代の歌人くらしい頃からそれらしい用例を見出すことができる。しかし、他の意味の例に比べて存在を確認できる時期が比較的遅いようではある。

なお『角川古語大辞典』では、

⑰(病床の柏木が)つれづれに思つづくるもうちかへしいとあぢきなし。

(源氏 柏木 一二二八⑥)

のような例を、副詞「うちかへし」の項の「②しきりにつものさま。かえすがえすも。どう考えても」の例としている。これらは確かにそのように訳されるものであるが、繰り返し思ったびにそのように感じられるというところから、「感情の支配性・深さ」といった意味に転じたものと考えれば——このような方向の意味展開を示した語としては、「カヘス」の終止形重複「カヘスカヘス」がある——「反復」からの派生的意味として見ることができよう。あまり意味区分を多くすることも不都合なので、本稿ではこの意味のものは「反復」の中に加えておくことにする。

#### 四 「カヘス」の意味の整理

『角川古語大辞典』では、「カヘス」を十六の意味に分けており、それを一部略記して列挙しておく。

①表と裏、前と後ろを逆向きにする。折り返したり裏返したりする。

②横転させる。転覆させる。ひっくりかえす。

③田の土を掘り返す。耕す。

④もと居た所へ戻らせる。帰宅させる。

⑤もったり借りたりしたものを返却する。

- ⑥返歌や返事をする。  
 ⑦もとの状態にもどす。  
 ⑧飲み込んだものを吐き出す。  
 ⑨同じ動作や思考を反復する。  
 ⑩刀などでいったん斬りつけたり貫いたりしたのを抜き取る  
 きの勢いで、もう一度斬りつける。  
 ⑪いったん染めたものをさらに他の色に染め重ねる。  
 ⑫卵を孵化させる。  
 ⑬(音楽用語)  
 ⑭(連俳用語)  
 ⑮(反切用語)  
 ⑯自動詞のように用いて、もとの所へ戻る。引き返す。  
 これらの意味を、まず「ウチカヘス」の場合と同様の五分類に  
 よって整理し、それぞれがどの程度の用例数を有するか大体的な見  
 当をつけるために、八代集の合計と源氏物語での用例数を表二に  
 示しておく。

表二 「カヘス」の意味別の用例数

源氏	八代集計		逆転	逆方向(物・事柄・人)	元の状態	
	25	32			反転	反復
	2	16	0	1	0	1
	0	1	23 (6・4・13)	19 (7・6・6)	0	1
	0	1			0	1

【「反転」の意のもの】  
 『角川古語大辞典』の①②、さらに③の意味がこれに相当し、  
 「ウチカヘス」「カヘス」に共通する意味と言える。源氏物語の一  
 例は袖を翻すというもの、歌の用例は多くが  
 ⑬いとせめて恋しきときはむばたまの夜衣をかへしてぞ着る

(古今 五五四)

のように衣の類を裏返すというものである。

【「逆転・一転」の意のもの】

前掲の辞書の項目には認められないが、

⑱この春ぞ思ひはかへすさくら花むなしき色にそめし心を

(千載 一〇六五)

の「かへす」は「心を改める・一転させる」の意に介されるから、  
 これの例となりそうである。ただし新日本古典文学大系の注は  
 「翻」の翻訳による歌語として扱っており、とすると和語として  
 の「カヘス」そのものの意味分化の過程で生じてきたものではな  
 いということになる。

用例⑱の存在から、「逆転・一転」の意味は一応「カヘス」にも  
 存在するものとは言えるが、「ウチカヘス」の場合と同様に「反転」  
 の意味から転じてきたものと考えてよいかは、問題である。

【「逆方向への移動」の意のもの】

これの「物対象」が、『角川古語大辞典』の⑤もらったり借り  
 たりしたものを返却するに相当し、⑧飲み込んだものを吐き出  
 すこの「物対象の逆方向への移動」の延長線上のもの、「人対象」  
 が同じく④もと居た所へ戻らせる。帰宅させるに相当し、⑬  
 もとの所へ戻る。引き返すはそれが自動詞的に用いられている  
 もの、「事柄対象」が⑥返歌や返事をするにほぼ相当するもの  
 と言える。他に⑩の意味も「物対象の逆方向への移動」の延長線  
 上にあるものであろうか。

「カヘス」の用例の中ではこの「逆方向への移動」の意のもの  
 が最も多く、「ウチカヘス」にこの意のものが少なかったことと際  
 立った対照を示す。

## 【「元の状態への変化」の意のもの】

『角川古語大辞典』では「⑦もとの状態にもどす」の意味がこれに相当する。これの例として『角川古語大辞典』では平家物語の例が、『岩波古語辞典』では夫木抄の例が挙げられているが、次の例もこれに入るかと思う。

⑳七夕に花染め衣ぬぎかせばあかつき露のかへすなりけり

(千載 二二九九)

この「かへす」は、『角川古語大辞典』の「⑩いったん染めたものをさらに他の色に染め重ねる」の意味と考えられなくもないが、「あかつき露」が「花染め衣」を別の色に染めかえたと言うこととみるよりは、古今集七九五の歌に見られるように「花染め」はうつろいやすいものと考えられていたようだから、露が色をあせさせた——染める前のようにした——とみる方が自然であろう(「逆方向への移動」の意との掛詞にもなっている)。ただし⑩の意味もここから更に転じて生じたものであるかもしれない。また「⑫卵を孵化させる」の意味も、卵を生んだ親鳥と同じような形にするところから来たものだとすれば、「元の状態への変化」の一種ということになるうか。

「元の状態への変化」は、一応「ウチカヘス」「カヘス」に共通する意味のようであるが、「カヘス」の方の複合動詞になっていない単独の形での用例は少なく、特に古い時期の例が見つけにくい(「卵を孵化させる」意味を「元の状態への変化」一種とすれば、これの例は宇津保物語の頃からあるので、話が違ってくるが)。

また、この意味の「ウチカヘス」の方は他動詞性が稀薄になっていると見られたのに対して、「カヘス」にはそのようなことは見受けられず、この点は両者の相違点と言えるかもしれない。

## 【「反復」の意のもの】

『角川古語大辞典』の⑨に当たるものであるが、「カヘス」が単独で反復の意を表すと見られる例は、

㉑思ひを覆すに(覆思之)、猶是れ過去の怨なり。

(日本霊異記 中巻 三三三話)

㉒新小田をあらすきかへしくても人の心を見てこそやまめ

(古今 八一七)

がある程度である。しかも㉒は序詞との関連が考えられ、㉑は三味院本の訓釈で「覆」を「カヘス」としているのに従えば反復の意の「カヘス」の例となるものの、新潮古典集成では「カヘシ思フ」、日本古典文学全集では「カヘスカヘス」という訓みを採用している。

ただし複合動詞や終止形重複「カヘスカヘス」にまで広げれば、「カヘス」が反復の意に関与していることは多いと言えるが、「カヘス」単独では「反復」の意が認められるか、微妙なところである。また「つくづく」のように訳されるものは、やはり終止形重複「カヘスカヘス」まで入れればあるが、「カヘス」単独では見出せない。

## 五 「ウチカヘス」と「カヘス」の比較

「ウチカヘス」と「カヘス」を比較する場合、同じ意味区分に属する「ウチカヘス」「カヘス」の例が、比較に耐える程度の数だけ同一の資料内において存在することが、あまりない。従って、両者の比較は、「カヘス」「ウチカヘス」の意味区分の対応・非対応と、それぞれに属する用例数の多寡に着眼するというやり方が主にならざるを得ない。

このような観点から、前節まで五つに大きく区分して整理してきた「ウチカヘス」と「カヘス」の意味を比較してみたい。「カヘ

「ス」の方の調査・分析が必ずしも十分でなくそれに伴う制約はあるものの、現段階でいくつかの相違点を挙げることはできる。それらの相違点の中で最も重視すべきなのは、一方では非常に多用されている意味の例が、もう一方では非常に少ないといった場合ではないかと考える。その点で強く目を引くのは

「逆方向への移動」の意味のものが、「カヘス」では歌・散文ともに最も多いが、同じ意味のものが「ウチカヘス」には極めて少ない。

ということであろう。しかも数少ない「逆方向への移動」の意味の「ウチカヘス」は歌の中で掛詞として、あるいは縁語の関係で用いられた例であった。また「カヘス」の場合、物対象、事柄対象、人対象のいずれの例も一通り認められたのに対して、「ウチカヘス」の場合は物対象のみである。このように「逆方向への移動」の意味の「ウチカヘス」は、用法の幅も「カヘス」より狭いと言える。

これほど極端な差ではないが、

「ウチカヘス」においては、「反転」及びそこから派生と思われる「逆転・一転」の意味の用例が比較的多いのに対して、「カヘス」は散文ではこの意味の占める比重が少ない。また「逆転・一転」の意味は、「カヘス」の方には認められるか微妙である。

ということも指摘できよう。総じて「ウチカヘス」には、「カヘス」と比べて、「逆方向への移動」の意が稀薄である一方、「反転」系の意味の比重が高いところがあると言えそうである。

前稿で指摘した「ウチ+他動詞」の意味的な特徴(第一節参照)のうち、「ウチカヘス」と「カヘス」の右のような相違と関連づけることができそうなのは、

○対象の受ける影響・変化の弱さ

ではないかと思う。「逆方向の移動」においては、位置や所有権の変化が必ずあるのに対して、「反転」は対象の上下・前後・裏表の向きのみの変化で、対象の位置や所有権などの変化は伴わない。その意味では「反転」の方が「逆方向の移動」よりも対象の受ける影響・変化は一体に弱いもの・小規模なもの・限定されたものと言えるのではないかと思う(むろん対象が舟のようなものであれば、それが「反転」することは重大・深刻な結果をもたらすことになるのだが、それはまた別の次元のことであろう)。

他に

「元の状態への変化」の意味では、「ウチカヘス」では他動詞性が他動詞性が稀薄になっているのに対して、「カヘス」の方にはそれが認められない。

ということもあつたが、これをただちに前稿で指摘した

○対象への働きかけの弱さ  
ということと結びつけて考えられるかとなると、微妙なところがあり、今後更に検討したいところである。

更に

「ウチカヘス」には「反復」の意があるが、「カヘス」の方の単独用法で同じ意味が認められるか、はっきりしないところがある。

ということもあつたが、これを「ウチカヘス」と「カヘス」とを比較する上で問題になるような相違点として捉えるかどうか、また相違点として捉えるとするれば、「ウチ+他動詞」のどのような意味的特徴と結びつけて説明するのかという点についてはまだ結論を得るに至っていない。この点も更に検討を要する

ちなみに「ウチ」は「強意」の意であるとするような通説は、「ウチカヘス」と「カヘス」の比較においては認めがたく、瞬間

性や動作の始発に「ウチ」の特色があるとするとするような説も、「ウチカヘス」に関して適用することは難しいと思う。

(注)

- (1) 拙稿「ウチワラフ」の意味の時代的变化」（『国語語彙史の研究十六』和泉書院 一九九六）参照。
- (2) これについては、この「ウチ」は接辞化しており「ウチカヘス」全体で単に逆方向へ戻る意を表しているという見方もありそうであるが、大鏡に一例・今昔に五例見られる用例は、いずれも徒歩や車での移動ではなく、もっぱら馬に乗っての移動の場面で用いられているところから、このように解するのが適切と判断する。
- (3) 森田良行『基礎日本語1』（角川書店 一九七七）。大能清子「かえず・もどす」（都立大『日本語研究』4 一九八二）。斎藤倫明『現代日本語の語構成論的研究』（ひつじ書房 一九九二）第三部第一章。
- (4) 注釈書によっては「常に文おこする人の」の部分から始まる段とする。
- (5) この例の「ウチカヘス」は自動詞的になっていると思われる。他動詞としての典型的な例としては、鎌倉時代のものになるが「さて今は（舟を）うちかへせ」といふとき  
(宇治拾遺 卷三十四 一二四⑦)  
などがある。
- (6) 御堂関白集に同じ歌を収める（六一二）。
- (7) この例は複合動詞「思ひかへす」の例かとも思われるが、「思ひかへす」は、「思ったことを取り消す」という、むしろ「元の状態への変化」との繋がりをおぼわせる意味が強いようで、この例について考えられる意味とは異なる。

【引用・使用資料】

古今和歌集 後撰和歌集 拾遺和歌集 後拾遺和歌集 金葉和歌集三  
 奏本 詞花和歌集 千載和歌集 新古今和歌集（以上新日本古典文学  
 大系） 信明集（新編国歌大観 CD-ROM版） 日本霊異記（日本  
 古典文学大系） 蜻蛉日記（かげろふ日記総索引） 落窪物語（日本古  
 典文学大系） 源氏物語（源氏物語大成） 枕草子（枕草子総索引） 栄  
 花物語（栄花物語本文と索引） 夜の寝覚 狭衣物語 大鏡 今昔物語  
 集 宇治拾遺物語（以上日本古典文学大系）